

動物に対する共感性尺度の作成

問題・目的部分の要約

人間と自然との関係は現代的テーマの一つである。特に動物との関係は、アニマル・セラピーやペット・ロスなどとの関係で、その心理的利点や課題が浮かび上がっている。人間同士については共感性という概念を用いてその関係を検討することの有用性が指摘されているが、人間と動物についても、共感性という概念を用いることでさらに深く検討できるのではないかと考えられる。そこで本研究では、動物に対する共感性を測定する尺度を作成することを目的とする。

方法

調査内容

動物に対する共感性尺度は、既存の共感性尺度（Zeisberg, 1979；堀川, 1982；一宮・岡崎, 1997 など）を参考にしながら、新たに作成した。まず既存の尺度から、人間と動物との関係にも適用できると判断される項目を選出した。さらにペットを飼っている大学生 34 名にインタビューを行い、そこに表現された内容で共感性と判断される内容を加え、52 項目を作成した。その後心理学を専攻する大学院生 3 名に、内容的妥当性の判断や項目の類似性、表現のわかりやすさなどの検討を依頼し、最終的に 20 項目を利用することとした。回答は「はい」「どちらかといえば、はい」「どちらともいえない」「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」の 5 段階で求めた。

調査対象および方法

調査対象は、愛知県にある普通科高校の 1, 2 年生（男子 132, 女子 134）、計 266 名を対象として、2016 年 5 月に調査を実施した。調査用紙のフェイスシートには、調査への協力は任意であり、またそれ

によって個人が評価されるものではないことを明示し、加えて調査依頼時に調査実施者から口頭で説明を行い、その後同意者のみに回答を求めた。

結果

本調査は、266名から回答を得た。そのうち、欠損値を含んだ6名を除いた260名分の回答を分析に用いた。

まず、動物に対する共感性尺度の各項目について項目分析を行った。「はい」を5、「どちらかといえば、はい」を4、「どちらともいえない」を3、「どちらかといえば、いいえ」を2、「いいえ」を1として得点化した。項目毎の平均値、標準偏差をTable 1に示した。また項目ごとに各選択肢の度数を算出し、ある選択肢に極端に多数の回答が集中しているような項目もないことを確認した。そこで20項目すべてを用いて、因子分析（ミンレス法・プロマックス回転）を行った。

その結果、固有値の減衰状況は6.72, 2.27, 1.92, 1.30, 0.93, …であり、最大の因子数は4、スクリー基準からは3因子を抽出することが妥当であると考えられる。また平行分析の結果は3因子の抽出を唆していた。さらに、3因子解と4因子解を求め比較したところ、3因子解の方がより単純構造に近く、また解釈もしやすいことから、抽出する因子数を3として分析を進めた。

3つの因子を抽出する因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果、項目5, 8, 18, 20が複数因子に高く負荷していたため、これらを削除し、再度因子分析を行った。Table 1に最終的な因子分析結果を示す。なお、この3因子による累積寄与率は49%であった。また因子間相関は.44～.49であり、中程度の相関関係にあるといえるだろう。

第1因子は、「動物と人間は友達になることができる」「私が悲しい時には、動物はそれを分かってくれる」「動物に触れていると癒される」などといった項目が高い因子負荷を示しており、感情、情緒に関連した内容の項目群といえよう。また感情を人間と動物でわかりあえるといった項目も、この因子への負荷が高い。そこでこの因子を「感情的触れ合い」因子と命名する。

続く第2因子には、「動物の気持ちが分かるようになりたい」「動物は人間に気持ちを分かってくれたい」と思っているはずだ」「動物に私の気持ちを分かってくれたいと思う」といった項目が高く負荷した。動物の気持ちを分かりたい、動物に気持ちを分かってくれたいといった内容を意味する項目群といえるだろう。第1因子の内容と類似している面もあるが、この因子には分かりあうことへの希求を示す項目が多い。そこでこの因子を、「相互理解希求」因子と命名する。

第3因子には、「動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方が良い」「飼っていた動物を捨てることは絶対にしてはならないことである」などの項目が高く負荷している。人間に基本的人権があるように動物にもそれに類似したものを認め、それに対する配慮意識を表している項目群といえるのではないだろうか。そこでこの因子を、「権利への配慮」因子と命名する。

以上のような因子分析結果を踏まえ、動物に対する共感性尺度の下位尺度を構成する。それぞれの項目について、最も高い負荷量を示す因子を構成するものとみなすと、「感情的触れ合い」の下位尺度は6

項目、「相互理解希求」および「権利への配慮」の下位尺度は5項目で構成される。それぞれの下位尺度について、信頼性係数の推定値としてCronbachの α 係数およびMcDonaldの ω 係数を求めたところ、第1因子では $\alpha=.87$ 、 $\omega=.90$ 、第2因子では $\alpha=.80$ 、 $\omega=.85$ 、第3因子では $\alpha=.78$ 、 $\omega=.83$ と十分な値が得られた。そこで、下位尺度ごとにすべての項目を用い、項目平均値を各下位尺度得点とした。「感情的触れ合い」の平均値は2.95、標準偏差は0.83、「相互理解希求」の平均値は2.81、標準偏差は0.90、「権利への配慮」の平均値は3.70、標準偏差は0.76であった。

(以下、略)

Table 1
動物に対する共感性尺度項目の記述統計量

項目	M	SD	因子分析			
			F1	F2	F3	h^2
2 動物と人間は友達になることができる	2.91	1.07	.85	-.07	-.08	.62
4 私が悲しい時には、動物はそれを分かってくれる	3.05	1.04	.82	-.08	.05	.66
1 動物の顔を見ると、その動物が何を考えているのか分かる	3.00	1.14	.78	-.03	-.03	.56
6 動物に触れていると癒される	2.99	1.01	.64	-.05	.21	.54
3 人間と動物はお互いにわかり合える	2.69	1.07	.63	.24	-.12	.50
7 動物と一緒にいるとさびしさがまぎれる	3.07	1.10	.48	.08	.25	.47
9 動物の気持ちが分かるようになりたい	2.95	1.11	-.19	.76	.16	.58
13 動物は人間に気持ちを分かって欲しいと思っているはずだ	2.65	1.11	.14	.69	-.17	.48
12 動物に私の気持ちを分かって欲しいと思う	2.79	1.20	.12	.66	-.04	.49
11 動物の言葉を話せるようになりたい	2.35	1.23	.03	.65	-.09	.40
10 動物の鳴き声を、人間の言葉に翻訳できれば良いのと思うことがある	3.30	1.37	-.12	.59	.17	.39
17 動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方が良い	3.73	1.08	.02	-.17	.78	.54
15 飼っていた動物を捨てることは絶対にしてはならないことである	3.54	1.08	.00	-.04	.77	.58
14 鎖でつながれたり、檻の中に入れられた動物を見るとかわいそうになる	3.56	0.93	-.13	.10	.63	.39
16 飼われている動物はその家族の一員である	3.53	1.02	.13	-.01	.60	.44
19 人間は動物を大切にしなければならない	4.17	1.06	.11	.13	.38	.27
因子間相関			F1	.44	.49	
			F2		.43	
残余項目						
5 動物は人間の気持ちを理解することはできない	2.83	1.04				
8 動物も気持ちが表情に表れると思う	3.46	1.18				
18 動物は人間よりレベルの低い生き物である	2.52	1.09				
20 動物も人間と同じように仲間の気持ちが分かると思う	3.24	1.02				